

光明

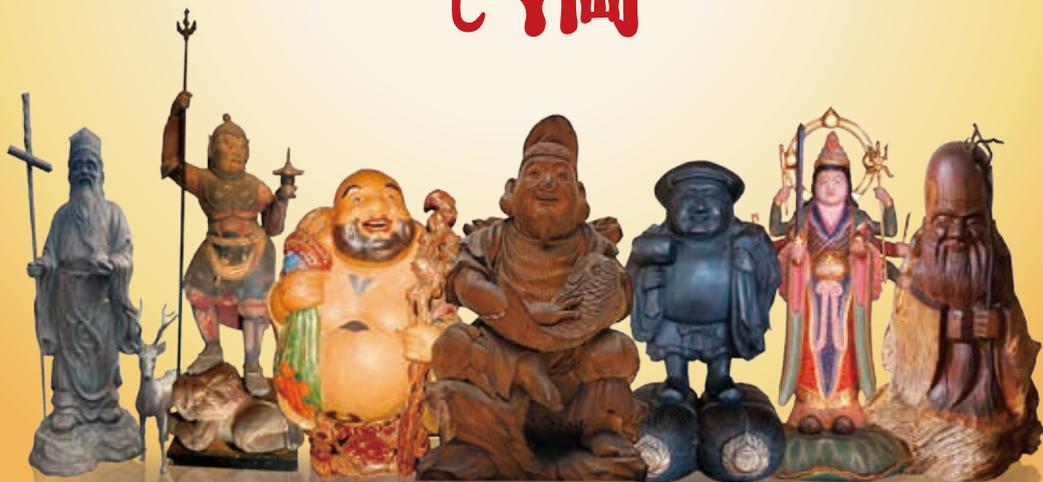
こうみょう

新春

第233号

〈特集1〉

福徳円満 七福神のはなし



最終回

齋藤 孝の学ぶ楽しみ

しん こん しゅう ぶ ざん は
真言宗豊山派

こころの安らぎを求めて



新年あけましておめでとございます
檀信徒の皆さまにおかれましては
すこやかな一年の幕開けを迎えられましたこと
心よりお慶び申し上げます
本年もより良き年でありますよう
ご祈念申し上げます
令和七年 元旦

真言宗豊山派第三十五世管長
総本山長谷寺第八十九世化主

かわ また かい じゅん
川俣海淳

新しい年の始まりに川俣^{かわい}海淳^{かい}にお言葉を頂戴しました。

——総本山長谷寺化主にご就任された今のお気持ちをお聞かせください

私は長谷寺において長く本尊十一面観世音菩薩さまにお仕えして参りました。その間、多くの檀信徒の方々が本山を訪れ、観音さまのお御足に触れてご縁を結んでくださいました。

春夏秋冬、いつお参りに来られても良いように長谷寺を美しく整備すること、そして観音さまと檀信徒の方々の橋渡しをすることが私の役目であると考えております。

立場が変わりましても、その担い手であることは変わりません。そして、観音さまと檀信徒を繋ぐということが、次の世代に長谷寺を引き継いで行くことに繋がると信じております。

—— 海淳^{かい}のご自坊は奈良県の岡寺ですが、地元への想いをお聞かせください

長谷寺と岡寺は、同県というだけではなく、西国三十三所観音霊場の第八番札所と第七番札所であり、お隣同士でもあります。

両寺院ともに1300年の古い歴史を持ち、長谷寺は木像、岡寺は塑像^{そぞう}（土でできた像）の大きな観音さまをお祀りしています。

近年、その二か寺に室生寺と安倍文殊院を加えて、「奈良大和四寺巡礼」を立ち上げました。



光明

目次 新春
第233号



表紙写真

恵比寿神 板橋区観明寺
大黒天 江戸川区善養寺
毘沙門天 板橋区延命寺
弁才天 豊島区南蔵院
布袋尊 葛飾区良観寺
寿老人 八千代市長福寺
福祿寿 松戸市円能寺

- 01 | 管長猯下のお言葉
- 05 | 特集1
福徳円満 七福神のはなし
- 13 | 仏道・心の処方箋⑤
- 15 | 法事のしおり④
- 17 | 特集2
一年を知る
~どこかで見たけどよくは知らない時間のおはなし~
- 23 | なるほど仏事のQ&A
- 25 | 最終回
齋藤孝の
学ぶ楽しみ 心穏やかに生きる⑧
- 27 | 仏教童話⑭④
群れを離れた象
- 31 | 弘法大師に学ぶ⑨
- 33 | 作品募集 仏さまを描いてみよう!
- 35 | 最終回
必見! 長谷寺の寺宝⑧
- 37 | ヘルシーうれしい 精進料理③④
- 40 | こうみょうパズル

今は黙っているだけでは人は来ない時代です。「奈良は都の周辺と鹿だけではなく、大和の国中にも立派なお寺がたくさんあるんやで」ということを皆さまに知っていただくために、時代にあった手段を用いて長谷寺と奈良の良さを発信していきたいと考えております。

— 近年、若年層にも長谷寺の魅力が広がっています。猯下がお考えになる長谷寺の魅力とは何でしょうか

長谷寺は、別名「花の御寺」と呼ばれるとおり、一年を通してたくさんの花々を楽しむことができます。ここ数年は、牡丹を追い抜く勢いで紫陽花の季節のお参りが増加しています。

若い男女・お子さま連れ・外国の方といった、これまでとは違う参拝者層の方たちが多く見受けられるようになりました。

お目当では紫陽花の花をはじめ、季節の花々であっても、登廊に連なる吊燈籠や、大きな観音さまの慈悲のお姿を、初めて目にして感動する人が多くおら

れました。

その様子を見て、長谷寺の景色や雰囲気はもちろんのこと、どんな時でも人々を見守る観音さまのお姿が、老若男女・国籍を問わず、人を惹きつける魅力に溢れているということを再確認いたしました。

檀信徒の皆さまへ

長谷寺には全国に約三千の末寺がございますが、その多くが関東を中心とした東日本に集中しています。現代は交通手段が発達したとはいえ、長谷寺参拝の計画を立てるのは大変なことだと思います。そのような中でも、菩提寺の団体参拝や、個人の旅行で参拝をいただいている皆さまには深く感謝申し上げます。

季節を問わず、お参りするたびに新たな発見、感動を得られるのが長谷寺です。

どうぞお越しの際には観音さまとのご縁を一層深めていただき、こころの安らぎを得ていただければ嬉しく思います。

「一周忌」

勢至菩薩



わが国の法事は、中国の代表的な思想である儒教の影響も受けています。たとえば、一周忌や三回忌の仏事は、小祥や大祥という儒教の儀礼がもとになっているのです。

儒教では、故人が亡くなった翌年に小祥、二年後に大祥の供養をします。この小祥をもとに一周忌が生まれ、大祥から三回忌が成立しました。

大祥は「三年におよぶ喪」が明けるときの儀礼ですが、儒教には日数の数え方に特徴があり、実際には没後二年目に行います。三回忌の法事が、亡くなって二年目に行われるのも、この大祥の影響です。

年に一度めぐってくる命日

を、祥月命日といいます。正しくは正月命日と書くのですが、それでは年の始めの正月と混同されることから、小祥や大祥にある祥の字をとって、祥月命日になりました。

一周忌の本尊は勢至菩薩です。偉大な力を獲得した仏さまとして知られ、人々にほどこす慈悲のめぐみは、過去、現在、未来の三世にわたります。そのお姿は、左手に蓮華の花を持ち、右手は三本の指をやさしく曲げています。

左手の蓮華は、誰もが等しく持っている清らかな心を表したものです。一方、右手の三本の指は、三つの鋭い切っ先がある

法具をかたどっています。武器から転じたその法具には、悟りの妨げとなる煩惱を打ち砕く力が宿っているのです。

泥の中から茎を伸ばし、泥に染まらず美しく咲く蓮華。その花のように、煩惱うずまく世の中にあっても、煩惱に染まるとなく清らかに生きることが、仏教では目指します。勢至菩薩は、偉大な智慧の力を発揮して、私たちの清浄な心の花を大きく開いてくれます。

亡き人の一周忌を迎えるにあたり、本尊である勢至菩薩に祈りを捧げてみましょう。蓮華のようすがすがしい心で、供養のときを迎えることができるはずです。

勢至菩薩

種子 「サハ」

真言 「オン サン サン ザンサク ソワカ」



真言の意味

「オン サン ジャン
ジャン サハ スヴァー
ハー」
（ジャンは煩惱を表す。それを除く意のある真言）

雪中柳鷺図

〜画と付け合い語の関係性について〜

『俳諧類船集』。これは、延宝五年（一六七七）に高瀬梅盛（一六一九―一七〇二？）という人によって著された本です。彼は江戸前期に活躍した俳人。江戸時代には俳句という言葉はありませんでした。今でいう俳句は「俳諧の連歌」と呼ばれていました。もともと「俳諧」は滑稽という意味。「俳諧な（の）●●」という言い方で使われていました。そしてそのうち「連歌」が略されて「俳諧」というひとつの名詞になっていきます。

もともと和歌には口語体、いわゆる「俗語」は使えません。それを敢えて使い、正統派である和歌から分岐したのが俳諧の連歌で、だ

から「滑稽」なのです。自らを「滑稽」「俗」な文化の担い手として、自虐（？）しながらもそこに愉しみをみつけるのが俳諧の連歌。

冒頭の『俳諧類船集』は、（正統の連歌も含め）俳諧の連歌で使う付け合い語をまとめた、いわゆる辞典。付け合い語とは、何人かで歌を繋げていくときに使う、縁のある名詞のこと。古来、日本には「連想」という文化が根付いてきました。この名詞にはこのことばを。そうして連歌としてどんどん繋げて詠んでいくのです。そして、付け合い語は実は絵画ととても深い関係があります。

今回は、そこから「雪中柳鷺図」

に迫ってみましょう。本作は狩野主信（一六七五―一七二四）が描いた、雪が降り積もる柳に白い鷺が止まる少し寒々しい印象の美しい作品です。

それでは、なぜ「雪」の「柳」に「鷺」なのでしょう。まず鷺。鷺の付け合い語は沢山ありますが、そのなかに柳があります。柳には鷺。それらと雪が繋がっています。この言葉がどういった経緯で繋がりを持ってきたのか。柳に雪。そこから柳に白鷺を連想したかもしれません。

歌を楽しむ人々は四季折々の景色を見ながら、そして友人同士でお茶を囲みながら、戯れに連歌を

愉しみ、そこから、言葉の「連想」が少しずつ定着してきたのではないのでしょうか。

付け合い語集は、『俳諧類船集』以外にもあり、江戸初期、俳諧が流

行り始めた頃に多く刊行されています。俳諧の付け合い語から、絵画の画題となることも。絵画は文学や文化や歴史と深く関わって描かれてきました。様々な世界が絡み

合って一枚の絵が完成されていると思うと奥深いものです。

長谷寺学芸員 久野由香子



雪中柳鷺図